

## 縦横無尽 タテとヨコ色とかたちのフィールドワーク(5) : 異形の織物1 : 管状の織物

著者	吉本 忍
雑誌名	月刊染織
巻	274
ページ	41-43
発行年	2004-01-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5209">http://hdl.handle.net/10502/5209</a>

# 縦横無尽

# タテとヨコのファイールドワークの色とカタチ

吉本 忍

## 異形の織物① 管状の織物

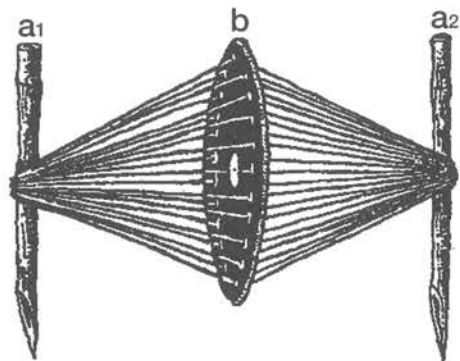


図1 ジャワ島のブローラにおける管状織物を織るためのタテ糸の保持方式  
 (“De Inlandsche Kunstnijverheid in Nederlandsch Indië II, De Weefkunst”より)  
 a1-タテ糸保持棒、a2-タテ糸保持棒、b-タテ糸整列板

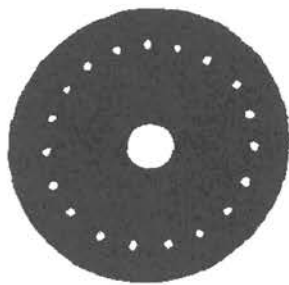


図2 ジャワ島ブローラで管状織物を織るために使われていたタテ糸整列板  
 (“De Inlandsche Kunstnijverheid in Nederlandsch Indië II, De Weefkunst”より)

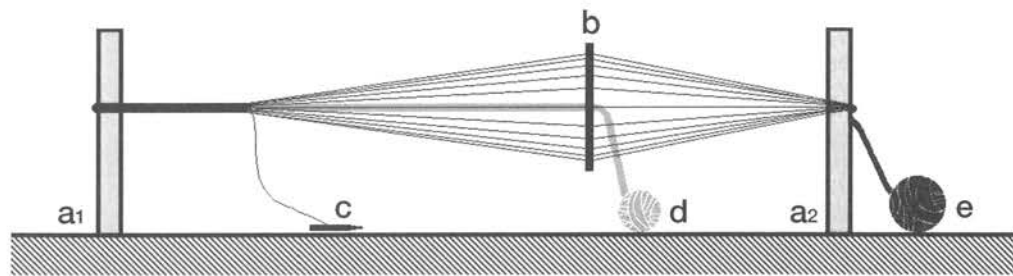


図3 ジャワ島ブローラの管状織物用織機の基本構造 (推定)  
 a1-タテ糸保持棒、a2-タテ糸保持棒、b-タテ糸整列板、c-緯入具、d-芯材の玉、e-タテ糸の玉

われわれ日本人の多くは、織物の織りあがりのかたちについて、常識的に四角形であると理解してきた。しかし、そうした常識はあくまでも日本人の常識であって、世界の常識としては通用しておらず、世界の広範な地域では四角形以外に輪状の織物も織られている。したがって、織物の基本となるかたちは四角形と輪状であるといえるが、先月号では、さらに四角形と輪状以外の例外的な織物のかたちとして、管状の織物、丸紐状の織物、杖状の織物、髻状の織物、楕円状の織物など、

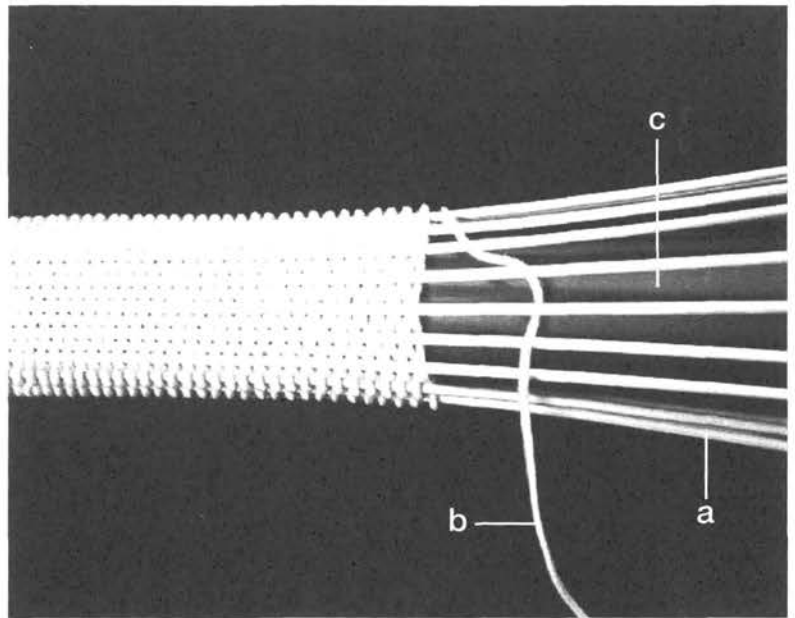
さまざまな異形の織物が存在していることを紹介した。今回は、それらの異形の織物のうちから管状の織物について、さらにくわしく説明する。

### ジャワ島ブローラの管状織物

わたしが管状織物の存在を知ったのは、1970年代の前半であった。ただし、それはファイールドワークの現場においてではなく、1912年にオランダで出版された J.E.Jasper の Mas Pirngadie の共著による “De Inlandsche Kunstnijverheid in Nederlandsch Indië II, De Weefkunst” (『蘭領インドの工業第2巻 織物工芸』) にあらわされた記述によるものであった。残念ながら、その記述はさほどくわしいものではなく、管状の織物がインドネシアのジャワ島中部のブローラで織られ、ランプの芯や手綱の表面部分の被覆材としてもちいられていたことなどの記述や、そうした管状織物を織るための織機(織り具)の構成部品などについての若干の記述に、図2点(図1と図2)が添えられているだけである。

“De Weefkunst”の刊行から70年あまりの年月が経過した1980年代のはじめ、わたしはバリ島を拠点として3年間にわたってインドネシア各地でファイールドワークをおこなっていた。そうしたファイールドワークのなかでは、ブローラとその周辺に住むジャワ人のもとで、管状の織物について若干の聞き取り調査もおこなった。しかし、その時の調査では、管状織物が20世紀前半頃までは織られていたらしいことや、繊維素材が木綿で組織織が平織組織であったらしいという情報を得

1. 製織途中の管状織物  
(イメージ写真)  
a-タテ糸、b-ヨコ糸、c-芯材

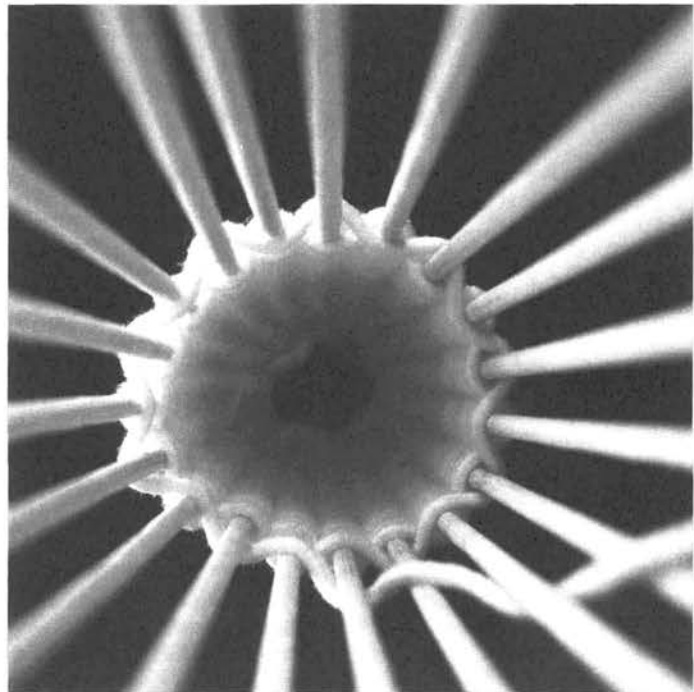


たものの、それ以上のくわしい情報はなく、管状の織物や織機などの実物資料を確認することもできなかった。したがって、以下では「De Weerkunst」の記述と図にもとづいて、ジャワ島のブローラで織られていた管状の織物とその製作技術について説明する。

## 管状織物の製作技法

ブローラで管状の織物を織るために使われてきた織機の構成部品には、タテ糸保持棒(2本)、タテ糸整列板、緯入具、緯打具がある。タテ糸保持棒は、図1では、2本とも一方の端が尖っていることから、地面に打ち込んで使用したと見られる。タテ糸整列板は、

2. 製織途中の管状織物内部  
(芯材を取り除いた状態のイメージ写真)

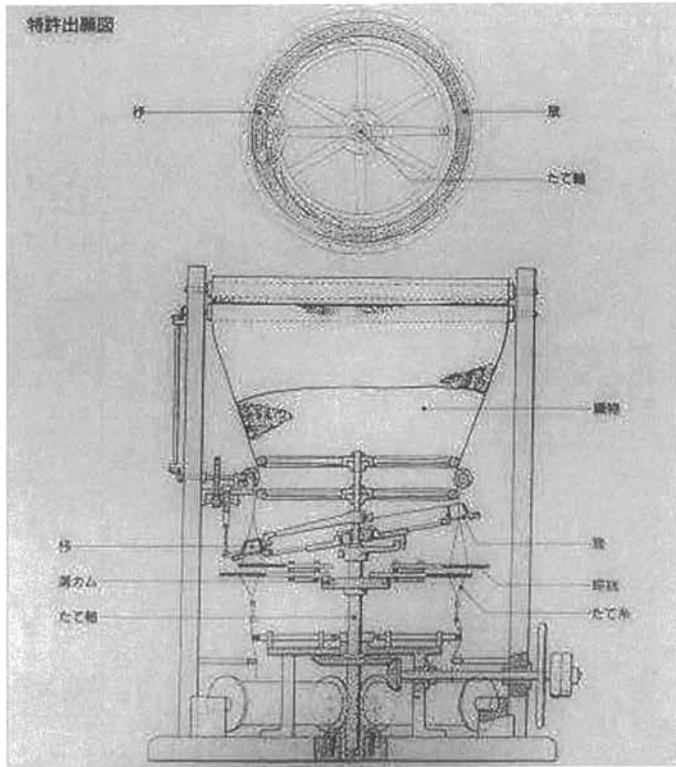


チーク材でつくられた円盤状の板で、図1、および図2に見られるように外縁部と中央部に穴があいている。これらの穴のうち外縁部の小さな穴はタテ糸を通すための穴である。また、中央の大きな穴は、管状織物によって覆われるランプの芯や手綱の芯材としても使われる太い紐、あるいは籐を通すためのものである。ただし、外縁部の穴の数については、図1では21個、図2では19個と異なっている。緯入具については図がなく、「5本をひとまとめにしたヨコ糸は、一方が先の尖った糸巻きに巻かれている」という記述があるのみで、おそらくは網針のような道具が緯入具として使われていたと見られる。さらに緯

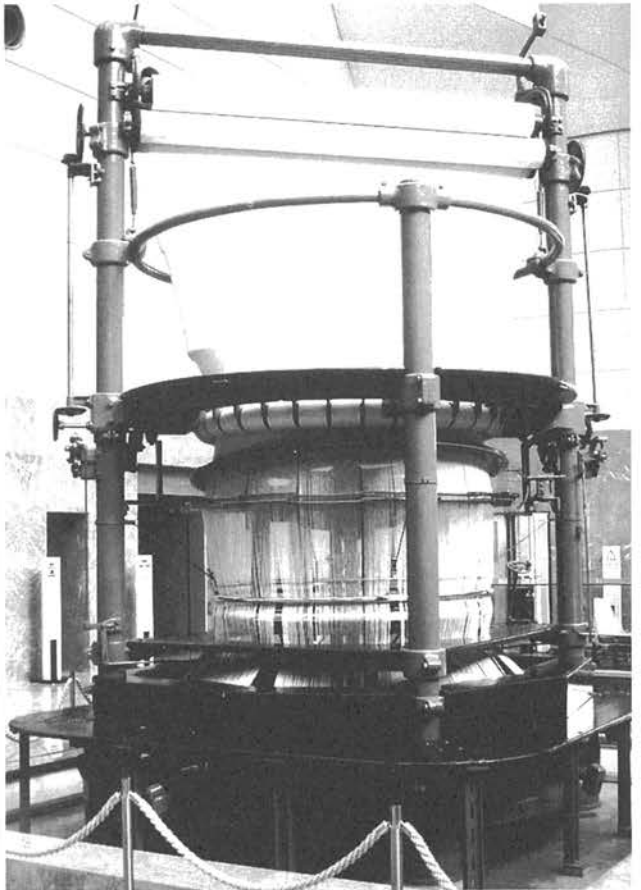
打具についても図はなく、「小さい棒」と記されているにすぎない。

なお、図1では、タテ糸整列板に通されたタテ糸が2本のタテ糸保持棒によって保持されており、一般的な機織りでは平面的に張りわたされるはずのタテ糸は、円盤状のタテ糸整列板の外縁部に通されて、前後にそれぞれ円錐状に膨らんだ状態で配列されている。しかし、2本のタテ糸保持棒の間隔はきわめて狭く、このような状態ではとても管状織物を織ることはできない。さらに、図1ではタテ糸整列板の外縁部の穴に通したタテ糸の両端が2本のタテ糸保持棒に結ばれているが、中央部の穴には紐も籐も通されていない。したがって、この図はタテ糸の保持方式を示した略図であると見られ、実際に管状の織物を織るためには、2本のタテ糸保持棒の間隔はもっと広くとられていたはずである。また、タテ糸整列板の中央部の穴にも、芯材となる太い紐、あるいは籐が通っていなければならぬ。そしてさらに、タテ糸、および、管状の織物の芯材となる紐や籐の長さについても、実際には2本のタテ糸保持棒の間隔よりも長いものが用意され、織り進むにしたがって、先端部のタテ糸保持棒にあらたにタテ糸を繰り出して結びなおしたり、織りあがった部分を手元部のタテ糸保持棒に巻き取ったりするといった操作もおこなわれていたことも考えられる。

したがって、これらの点を考えあわせると、ブローラの管状の織物を織るために使用された織機の基本的な構造は、図3のようなものであったと推定される。そして、一般的な機織りの作業工程では、ヨコ糸は平面的に張りわり



5. 環状織機の特許出願図



3. 豊田佐吉が発明した環状織機 (産業技術記念館)



4. 環状織機の中核部 (模型)

たされたタテ糸のあいだを左右に往復することによって織り込まれるが、管状織物を織るにはあいだには、ヨコ糸はタテ糸整列板の手前に円錐状に配列された奇数列と偶数列のタテ糸のあいだを、ラセン状の軌跡を描きながら通されていくこととなる。また、タテ糸整列板の中央部の穴に通された太い紐、あるいは籐などの芯材があることにより、タテ糸のあいだにラセン状に通されたヨコ糸を緯打具によって手前に引き寄せると、管状の織物は芯材をすっぽりと覆う状態で織り込まれていくこととなる。なお、芯材がない場合は、管状の織物を織ることは不可能ではないもののきわめて困難となる。

## 現代の管状織物

さて、民族技術としての管状織物については、わたしはこれまで以上にどのようなプロローラの例を「De Weefkunst」の記述と図によって把握しているのみである。その技術はおそらく20世紀前半に消滅してしまったと見られ

るが、日本をはじめとする一部の国々では、管状織物は今なお織りつづけられている。そうした現代の管状織物は、一般に「環状織機」と呼ばれる自動織機によって織られており、プロローラの管状織物がランプの芯や手綱の被覆材であったことと同様に、消防用ホースやテープなどといった特殊な用途の織物として使用されている。また、環状織機は動力で稼動する織機であるが、その織機としての原理はさきのプロローラで織られていた管状織物を織るための織機と共通のものである。

なお、環状織機はトヨタ自動車をはじめとするトヨタグループの創始者・豊田佐吉が1906年に発明したものである。その発明は、「De Weefkunst」の刊行の6年前であったことから、環状織機が豊田佐吉の独創によるものであったことは間違いない。そうした環状織機はトヨタグループにおいては実用化されることはなかったものの、トヨタグループによって設立された産業技術記念館（名古屋市のエントランスホールには、1924年に製造された環状織機が、産業技術記念館の設立の目的である「モノづくり」と「研究と創造の精神」を伝えるシンボルとして今も動態展示されている。

(国立民族学博物館 民族文化研究部 教授)

よしつぐ・しのぶ

## 文献

- Jasper, E. and Mas PASCADIE  
1912 *De Inlandsche Kunstnijverheid in  
Nederlandsch Indië II. De Weefkunst*  
De Boek & Kunststruikerij v/h Mouton & Co.  
吉本 忍
- 1990 「インドネシアにおける手織り機の類型論  
的研究」、『国立民族学博物館研究報告』15巻1号。